



ひつじ雲

NOIF
project

vol.8

公園で遊んでいるとどこか遠くから夕方を報せる鐘が響いてきて、迎えにきたママと手を繋いで一緒に帰る――子供たちの様子をあたしはジャングルジムのてっぺんから一人ぼっちで眺めている。

お手洗いのパパを待つうちにアイスが溶けて、べしゃって地面に落ちた。パパは泣きじゃくるあたしに「新しいの買って帰ろう」と言って頭を撫でた。あたしのパパは世界一だ。

遊園地の帰り道、あたしとパパは手をつないで他愛のない話をする。また行こうねって。そう言うパパは笑うけど、傍目には悲しそうに見えてて、でもそんなことないって知ってる。前に長く伸びた影や夕暮れの永遠みたいな時間がパパをそんな風に見せるのだ。あたしとパパをつなぐ手が、歩くりズムでぶらぶらと揺れる。そんな気息さがいい。

パパの無口さは男らしくて素敵だ。歩きながらあたしが話すのは、たとえば友達が面白いって言ってたアトラクションがそうでもなかったことや、パレードが子供っぽくて冷めたこと（でも楽しかった、って言う。本当のことだから）。パパはあたしの話に相槌を打ち微笑んでくれる。夕陽はいつまでも沈まなくて、路地も果てしなく続いてて。でも永遠じゃないからあたしは時間を惜しんで夢中で話をする。

夢中になり過ぎたのだろう。あたしは影が増えたことに気付かなかった。パパを挟んだ反対側に、あたしより大きくてパパより小さい影が一つ。ショックだったのは、その影がパパと手をつないでいたこと。

パパを見上げると、パパは隣の誰かと話をしていた。パパの向こうにピンク色のフレアスカートの裾がちらつく。パパの薬指にある銀の指輪が、夕陽に反射してこれ見よがしにきらきら光っていた。ねえパパ！ と声を上げて腕を引っ張ってもパパはこちらを振り向かない。それどころかパパは、信じられないくらい明るい声で笑ったり拗ねたような声を出したりと、無様で情けない軟弱な男に成り下がってて。もうはらわたが煮え繰り返って、パパッ、と怒鳴る。するとパパは悲しそうな顔でこちらを見てあたしの手を振りほどく。そして、あろうことかこのあたしを置いて、女と歩いていってしまう。走ってもあたしはパパに追いつけない。やがてパパと女は地平線の彼方にすっと落ちてしまう。同時に日が暮れた。

取り残されたあたしは涙と鼻水で顔中ベトベトになる。さっきパパが買ってくれたアイスはすっかり溶けていた。あたしの後ろには溶けたアイスが点々と続いていた。何がいけなかったのだろうか？ たとえば、アイスさえ溶けなければパパは行ってしまわなかったかもしれない。そんなめちやくちやな考えがだんだんわたしの中で絶対になって、ああ、私は明日もこの馬鹿げた妄想を繰り返すのだろうなと絶望する。

夕焼け雨が降っている。何年振りだろうか。

大急ぎで白い木綿の布を持って外へ出た。

物干しに掛けて布を雨に当てる。

夕焼けが消える寸前に、布を引き上げ、絞った。

「ああ...」

広げると夕焼けとまったく同じ茜色の布。私は夕食の仕度も忘れてうっとり布を眺めた。

翌朝、すっかり乾いた布はもとの白い木綿に戻っていた。

そのまま畳んで箆笥の抽斗に仕舞う。次の夕焼け雨は、明日か十年後かわからないけれど。

烏賊釣りの夜／立花腑楽

茜色の毛氈をずりずりと引きずりながら、夕陽が海の向こうへと沈んでいった。

ほの暗くなった海岸のそこかしこに、岩や流木に引っ掛けられて、千切れてしまった黄昏の切れ端が、ぼうっと寂しく燻っている。

もう少ししたら、潮が満ちる。そうしたら、帰る場所を失った黄昏の残滓たちも、残らず波にさらわれていくことだろう。ねっとりとした黒い海面を、淡い茜色の灯りが、ぷかりぷかりと沖に向かって流れ行く光景が脳裏に浮かんだ。

今夜は烏賊を釣るのによいかもしれない。

唐突にそんなことを思いついて、倉庫から釣竿を引っ張り出すべく、私は足早に帰路を急いだ。

背にした海から、徐々に波が高まる音が聞こえてくる。

夕焼けの雲海は、刻々と色が変わるから、次々と絵の具を出さなくちゃならない。
僕は飛行機の窓におでこをぶつけながら、何枚も空と雲の絵を描いた。
小さなパレットの絵の具が混ざり合って真っ黒になった頃、夜間飛行。

小馬が走ると子供も走る。

背に乗せた子供が眠る。小馬はゆっくり歩む。

子供が泣けば、尾で頭を撫でる。

夕焼け空に向かって小馬が歌う。子供も歌う。

子供はいつでも歌を歌うけれど、小馬が歌えるのは草原に日が沈みきるまでの短い間だけ。お日さまがちょっぴり油断しているその間だけ。

日が沈めば、子守はお月さまに交代だ。

改札を抜けて、帰路を急ぐ。

夕陽を背負った背中が、かあつと熱い。

駅前商店街の通りは、揚げたての惣菜の匂いと、燻された焼き鳥の煙——そこには、ほんの少し、煙草の煙も混ざっている——が、薄青く満ちていた。

背後を振り返ると、ちょうど駅舎に覆いかぶさるようにして、一体の巨大な影法師が、街を睥睨しているのが見える。腰を折り曲げた猫背の姿勢で、ぎよろぎよろと忙しく上体を動かしながら、街の細部を覗きこんでいるようだった。

日常。いつもと変わらぬ黄昏の空。

こちらからは逆光で真っ黒に染まっているため、その巨人の顔貌は、ついぞ拝んだことはない。ただ、きっと、哀しそうな表情をしているのだろうと思う。だって、あんなに必死に何かを探しているのだもの。それには一等、泣きそうな顔が似つかわしいに違いはないと思う。

驚くほどたくさんのカラスが、彼の頭部を旋回している。それが鬱陶しいらしく、彼は何度も何度も、長い腕で、顔の周囲を払うのだった。

18時を告げるサイレンの音が聞こえる。

夕陽はすでに没し、街にはじわじわと夜が沈殿してくる頃合いだった。

もう時限だと承知しているのだろう。茜天を衝く巨人は、憔悴したように一層せかせかと動きつつも、黄昏の残光がか細く消えるのと同じくして、じわじわと大気に霞むように、その姿を消してしまった。

その様子を見届け、ぽうっと息を吐き出す。再び帰宅の途へ着こうと向き直ると、顔馴染みのタバコ屋のおばさんと目があつた。彼女もまた、つい今しがた、私と同じ光景を眺めていたようだった。

「今日はちょっと長く残ってたわよね、あれ」

「そうですね。きっと夏が近いからでしょう」

いい加減に相槌を打っておいて、その場を辞した。纏い付く対象を喪ったカラスたちが、ぎゃあぎゃあ頭上で騒いでいる。

珍しく仕事が早く終わって帰路に就く途中、引き寄せられるように目についた商店街に入った。そこそこの賑わいがあり、店主が外で呼び込みをしている店もある。いつも仕事を終えて帰宅するときにはとっぴりと陽が暮れているが、今はまだ夕暮れ時だ。逢魔が時とも言うのだったかと思いながらぶらぶらと歩いていると、彼女を見つけた。幼いころ近所でよく遊んでくれた彼女と逢うのはもう何十年ぶりにもなるというのに、不思議とすぐに彼女だと判った。彼女とはいったいどうして逢わなくなってしまったのだったろう？ 突然引越してしまったとかおそらくそういった事情だったのだろうが、どうしても私はその部分をはっきりと思いだすことが出来なかった。

彼女は商店街のなかをずんずんと歩いてゆく。踝まであるスカートがひらひらと揺れていた。私は彼女に声をかけようと思いついたのだが、いつまで経っても追いつくことが出来ない。そのうちにひらひらと揺れるスカートの丈がどんどん短くなっていることに気がついた。それに合わせて彼女の身長もどんどん縮み、私が見知った何十年も前の少女の姿になる。私も当時の少年の姿になっている。

そのうちに私は、どこまで進んでも商店街が終わらないことに気がついた。行き交っていた人はいつの間にか消え、立ち並ぶ店も様子が変わって、店主の顔は影が落ちてよく見えない。少年の私は急に心細くなってその場にしゃがみ込むと、声を上げてわんわんと泣きだした。

気配に顔を上げると目の前に彼女が立っていた。彼女の顔だけは影が落ちることもなく私の記憶のなかのままだった。彼女は私に向かってにっこりと微笑んだ。私はどうして彼女と逢わなくなってしまったのかを思いだした。

「もう、おしまい」

そう言って彼女は蹲った私の顔に捲ったスカートを被せる。

けん、けん、ぱ。と跳ねる子どもたちを見ている。公園の時計は六時を示し、空は茜色に染まりつつあった。のどかなチャイム、子どもたちの帰宅を促す放送、ドヴォルザーク。子どもたちは砂地に描いた円を目印に、けん、けん、ぱ、を繰り返す。長く引き伸ばされた影が色濃い。

高学年の子は低学年の子を助ける。低学年の子は高学年の子を慕い、中学年の子は拗ねている。ブランコを漕ぐ。シーソーを揺らす。ジャングルジムに登る。けん、けん、ぱ、を見下ろす、夕焼けを眺める、見とれる。三羽のからすが夕陽を横切る。みんな、笑っている。静かな夕暮れ、夕飯の香り、銭湯の煙突から立ち昇る湯気。

けん、けん、ぱ。と子どもたちは跳ねる。右足、右足、両足。その度に子どもたちは帰ってくる。それからぐるっと回ってもう一度。低学年の子が列に割り込もうとするのを高学年の子が叱り、中学年の子はジャングルジムのてっぺんでぼんやりとしている。けん、けん、ぱ。子どもたちの声。けん、けん、ぱ。けん、けん、ぱ。けん、けん、ぱ。左足からは、決して、始めてはいけなかったのだ。

——ごはんだよおー。

子どもたちは一斉に帰ってゆく。けれど私だけは帰れない

花火が燦々と降る夜に／白縫いさや

今日の最後の客は、チビで痩せっぽちのみすぼらしい少年だった。まるで似合わない黒ぶち眼鏡の奥に涙を浮かべ、涙を啜りながら「お面、ください」と言うのである。ください、と言われてももう店じまいの時間であるし、残っているものといえば、蚯蚓、亀虫、蛭、あるいは蠅といったものしかない。売れ残りとはそういうものだ。好き好んで欲しがるものでもないだろう。しかしそれでも「欲しい」と言うので仕方なしに選ばせてやる。少年は真剣な面持ちでついに蠅の面を選ぶと、足を擦って長い夜へ向かっていった。

ひつじ雲

<http://p.booklog.jp/book/53857>

著者：NOIFproject

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/noifproj/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/53857>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/53857>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ